大正時代の神戸製鋼

竹崎茂助

卒業などどうでもよい！

明治四十四年の秋、芸陽高等小学校の二年生であった私は、受持の土居英成先生（後年、鈴木商店庶務主任になられた）から、神戸製鋼所へ入社しないかと勧められた。家庭環境から上級学校へ進むあてのなかった私は、翌春の卒業をまって入社したいと希望した。

ところが土居先生は「卒業などどうでもよろしい。入社するなら一日も早い方が得策だ」と言われ、とうとう説得されて、履歴書や健康診断書を神戸製鋼所に送った。十四才のときである。

入社が決定したのが、その年の暮もおしつまった十二月十五日。父と共に安芸の浜から沿岸通いの小蒸気船に乗って高知へ向った。

その晩は高知で一泊。翌日父と別れて浦戸港を出港、その翌朝未明無事神戸港に着いた。そして出迎えの実兄と共にひとまず土佐人の常宿、海岸通りの竹中旅館へ落付いた。

兄は神戸逓信局に勤めていたが、当時神戸には逓信局のほかに鉄道局もあった。兄は、時刻を見計らって近藤正太郎氏に電話をかけた。近藤氏は当時神戸高商（現神大）の三年生で、依岡省輔氏（当時神鋼取締役）邸から通学されていたが、土居先生と中学時代の同窓であり、かつ親友であったので、土居先生から近藤氏に、私の案内役を依頼してくれていたのである。間もなく来訪された近藤氏に案内され、神戸製鋼を訪問するため栄町から電車に乗った。

当時栄町は見事な赤レンガを敷きつめ、銀行会社が軒を並べ、文字通り栄えていた。鈴木商店はその三丁目にあり、四丁目には鈴木の本家もあった。しかし当時は自動車などほとんどなく、さすがの栄町にも、一台として自動車の通るのを見かけなかった。

阪神三宮終点（現国鉄三宮駅南側で、建物らしいものはなかった）から、梅田ゆきの電車に乗ったが、当時は一輌だけの編成であり、急行など無論なく、発車時間の間隔も長かった。そして三宮―梅田間約七十分運賃は二十銭ぐらいであった。

当時の歌に

〃箕面（みのお）服着て、阪神給で、南海電車へ勤めたい〃

というのがあった。箕面とは阪急の前身で、社長小林一三氏の面目躍如としたはでな従業員の服装、阪神は文字どおり給与が最高、そして南海は当時すでに停留所で切符を売っており、車掌が楽であるというのを諷刺したものであった。

脇の浜停留所で下車したが、むろん路上線で、現在の神鋼本社と田宮記念館の間ぐらいの位置にあった。小野浜貨物線をくぐると、すぐ神鋼の正門で、事務所は小じんまりした木造二階建てであった。応接間で松尾亮庶務主任に面接、田宮重役もわざわざ部屋に来られてあいさつをされた。そして一応近くの寄宿舎へ引揚げ、翌十八日から出勤した。

電話交換もぼんさんが

当時の神鋼は、夏、冬を問わず朝七時の始業、夕五時の終業で、休日は一日、十五日の月二回だけであった。現在のように一日七時間、祝祭日全休、さらに週休二日制の企業が多くなりつつあるのと比較すると隔世の観がある。職員であれば、朝、昼の食事は会社の食堂で自由に食べられたが、朝は七時のサイレンと同時に、入口でかまえていた松尾老主任が扉を閉めて、何人も中へ入れなかった。だから近くに住んでいた多くの社員の中には、ズボンのボタンをかけかけ走る者、松尾老と入口で押問答する者など、さまざまな光景が絶えなかった。当時の神鋼は、その年の四月に法人組織になったばかりで、資本金百四十万円、職員約六十名、工員約六百名、敷地約二万坪弱であった。当時の主な人々として記憶にあるのは次のとおりである。

（敬称略）

社長　黒川　勇能（海軍少将）
取締役　依岡　省輔（土佐出身・外務大臣格）
取締役　田宮嘉右衛門（伊予身出・内務大臣格）
技師長　松村　六郎（後年大島製鋼所創立）
販売部長　松尾忠二郎（後年播磨造船社長）
鋳物主任　諏訪常次郎

後年神鋼社長および神戸商工会議所会頭として名声をあげられた浅田長平氏は、京大卒後日比製錬所へ長期出張中であった。私の入社当時、大学出はわずか四、五名に過ぎず、技術、事務系とも学歴よりも実際的天才型が多く、いずれもその筋の権威者で、どこへ出してもひけをとらぬ偉者（えらもの）ぞろいであった。

事務所には受付もなく、電話交換手もおらず、すべて雑用は〃ぼんさん〃（給仕の別名）であった私、加納美哉喜、西野豊の三人で分担した。その月の末、初めて給料をもらったが、中身は金一円也であった。当時といえども神鋼級の企業で、一円より安い月給者がはたしてあっただろうか。おそらく私は最も低い給料から出発したと思っている。もっとも衣食住および夜学の費用はすべて会社持ちだったし、日曜ごとに日曜料として十銭支給され、隣席の大人たちからうらやましがられたりした。

輸入の水圧プレス大活躍

翌年四月、近藤氏が神戸高商を卒業して入社された。同氏と私の関係は最も深く私の一大恩人であった。

このころ工場の西北端の一隅に、二階建て木造の新寄宿舎が完成、松尾舎監も家族共に住まわれた。七月には明治天皇薨去、続いて乃木将軍夫妻の殉死など、世は暗雲の中に垂れこみ、深刻な不景気が吹きすさんだ。

翌大正二年、呉工廠から新技師長、松田万太郎氏が入社された。松田氏は温厚篤実、そしてあらゆる技術に造詣深く、事務系の松尾氏と共に、技術系、事務系の双へきであり、その上に依岡、田宮の両巨頭が盤石のかまえをもって当たられた。松田新技師長入社に反抗して、松村前技師長が東京に大島製鋼所を創立、神鋼各部から有能者を引抜き、神鋼に一大恐慌を与えた。

そのころ私は、抜てきされて会計係専属となり、主として月二回の従業員積立を担当した。ところが記入簿は一冊あての帳簿になっていて複雑であったので、これを簡明なカード式に改めた。困ったのは積立金の利息である。最初から全然付けていなかったので忙しい月末などに、二、三名やめる者があると大変だった。そこで阪倉氏と相談して、あまり正確ではないが、一定の率を作成、全員の分を一瀉千里に付けてしまった、というようなこともやり事務能率を向上させた。

当時不況はますます深刻さを増していた。田宮氏が、その月の売上げが「十万円を割ったのか？」と悲痛な言葉をもらされたのもそのころである。そして私は、南主任から「一万円以上の掛売者がきたら応接室へ通すよう」と命ぜられ、そのつど支払いについて交渉しておられた。この年、田宮、諏訪両氏が初の渡欧をされた。当時日本にはまれな千五百トン水圧プレスを購入するためであるが、翌大正三年にぼっ発した第一次世界大戦の造船景気に際し大活躍した。工場内はいたるところクランクシャフトの山、神鋼を文字通り起死回生に導いたものである。

田宮氏の渡欧中は、代理として銀行系の佐久間心一郎氏が重役室に陣取られたが、松尾営業部長とことごとく意見を異にし、時に廊下をはさんで論争する場面もあった。

町永三郎氏（後の神鋼社長）の入社もこの前後であったと思う。そのころ神戸高商主催のボートレースが毎春敏馬（みるめ）の浜で挙行され、大変な人気であった。特に阪神間で一、二を争う神鋼と三菱造船所の競争は圧倒的な評判で、選手たちの猛練習はもちろん、われわれも昼休みには小野浜線の路上にのぼり、町永氏が作詞した

〃六甲の雪、摩耶おろし
黒煙乱れて、飛ぶところ
ここころがねに、きたえたる
熱血男児、いざや立て〃
（以下略）

の応援歌を一生懸命けいこした。

芦屋からでは会社が遠い

さて、私は相変らず会計係をしていたが、机をへだてた販売係員の電話の応答や、商売のかけひきにあきたらないものを感じ、意を決して松尾部長に対し「私を販売係にしてください」と懇願、松尾部長も幸い私の切望を入れてくださった。私は商売が好きで、わずか九才の夏、出入のうなぎ屋に頼んで、三里の山奥までタナバタの短冊を売りに連れて行ってもらったことがある。

販売係の最初は伝票書きであった。ところがその暮の忘年会のとき、各自が得意のノドを披露したが、何も歌えぬ私は仕方なく、〃土佐で生れて、神戸で育ち今じゃ製鋼所で、あの伝票書き〃とやってのけた。これが効果があったのか、翌日松尾氏から〃君は今日

からドリルの販売を手伝え〃と命ぜられ、福渡氏の部下となった。そして同氏が播磨造船所の購売課長に栄転し、後任の三橋規十郎氏も退社することになったので、再度松尾部長に要望して「私にドリルの販売一切をまかせてください」と懇請、〃ドリルの中村（改姓）〃の第一歩を踏み出すことになった。その時たしか十八才であったと記憶する。当時田宮氏は現灘駅のすぐ南に住んでおられ、会社へ五分とかからなかった。いつも朝早く出社され、各工場一巡後朝食のパンをとられ、昼食は私たちと同じ食堂で同じ食事をされた。後年芦屋へ移られたが「どうも芦屋から会社へは遠くて……」ともらされたと聞く。田宮氏なればこそ通じる言葉である。

依岡氏の巨軀と対照的な小柄な田宮氏は、満身経営者の権威にあふれて、私の知る範囲ではこの方の右に出る人はない。現在神鋼本社と向い合って田宮記念館が建てられ、その遺徳を永久にしのんでいるのは、まことに当然のことと思う。多忙な田宮氏は理髪に行くひまもなく、近くの散髪屋に来てもらって、撞球場でやるのが例であった。しかし、いったん月末の支払い等になると、百枚以上の小切手にいちいち自署して、ゴム印などは用いなかった。また田宮氏は廉潔の士で、商人等からの贈り物は一括して会社へ運ばせ、別に一等十円の商品券を加えて、職員のくじ引にあてた。私も一度上等の反物が当り、交換手に頼んで縫ってもらったことがある。因島の備後ドックから届けられた数千円の報酬も、すべて会社の収入として、個人的には一切受取らず、神鋼から担当者として出張していた阪倉氏が感心していたのを聞いたことがある。

このころ八幡製鉄所の技術を取入れ、初めてバーやアングルの製作を開始したが、同所から雇入れた技師の給料が百五十円、当時神鋼には百円を越す給料者は一人もいなかった。

スペインかぜの後米騒動

大正七年だったと思うが、新寄宿者が上筒井の高台に竣工、私も南側二階の一室をあてられた。そのころスペインかぜが大流行し、神鋼内でも一家数名の犠牲者を出す大悲惨事となった。

有名な米騒動が起ったのも同年で、神戸ではまず鈴木商店が焼打ちに会い、寄宿舎から見ていると、筒井神社の森をへだてた眼下の神鋼の一角にも火の手があがった。社倉が暴徒におそわれたのであった。私は翌日八幡製鉄所に出張したが、北九州地方の騒動はこれからが本番らしく、軍隊を中心とする大変な警戒であった。

その前年、大正六年には神鋼の門司伸銅所が創設され、製鉄事業のほか、念願の伸銅事業への第一歩を踏み出した。

大正九年の春、私は東京詰めとなったが、そのころ工具部も異常な発展をもって好成績をあげ、大正八年度には半期の利益三十七万円（現在約五、六百倍として二億円程度）、しかも販売は私一人、現場約五十名の少数であった。そのおかげか、普通賞与金十ケ月のほかに特別賞与金として三十六カ月分をいただいた。

東京転勤当時の出張所は丸の内の東京海上ビルで、そのころは丸ビルもなく、東京海上ビルは大阪の堂ビルと共に代表的なビルであった。出張所はその五階にあったが、快晴の日など、窓から目前の二重橋を隔てて富士の霊峰が手に取るように眺められた。

当時の主な取引先は、海軍省、鉄道院、石川島造船所、芝浦製作所、日立製作所、横浜ドック、浅野セメント等があった。

大正九年十二月、鈴木岩治郎社長に代って、海軍中将、伊藤乙次郎氏が三代目社長に就任され、出張所の別室に席を設けられた。

その就任披露式が築地精養軒で催され、加藤友三郎海軍大臣（後に首相）等約二百名を招待、いずれも陸軍、海軍、政界、財界の主脳者ばかりで、その席順の決定にいたく苦労したことを覚えている。

八八艦隊ざ折により難関

私は滞京一年（このときから竹崎姓に戻る）にして、大正十年の春、呉出張所へ転勤を命ぜられた。

当時は第一次大戦後の不況で、いずれの企業もどん底の苦境に陥っていた。ところが海軍関係のみは例外で、八八艦隊達成のため、実に国の予算の半分を海軍が占め、そのうち半分が呉工廠の予算であり、日本中の有力な商人はみな呉に集った観があった。

呉については特に造詣の深い伊藤社長から、いろいろと注意や参考事項を伺って赴任した。呉工廠の大きさはずば抜けており、工員およそ三万五千人、それに艦隊でも入港するとそのにぎわいは想像以上であった。

工廠正門から購買課まで約一里、常にバスまたは人力車で往復した。

当時神鋼出張所（主任・加藤茂氏）は鈴木商店と同居していたが、日本製鋼、住友製鋼と共に工廠の三大発注先として群を抜いており、一口数十万円の入札はざらにあった。また呉の隣接地に広工廠の建設が始まり、この方の入札も次第に増加、宇品の陸軍関係の入札にも応ずる等忙しかった。帝人が発祥の地広島で事業を始めたのもこの前後であった。

神鋼本社でも八八艦隊対策として、敏馬海岸の埋立地（現在の脇浜地区）に巨大な工場を建設、また呉工廠から専門の技術者を招くなど着々対応策をたてていた。ところが晴天のヘキレキのごとく、例のワシントンにおける国際軍縮会議の結果、日本は惨たんたる比例に屈し、神鋼でも受注品の取消しが相次で、加工の中止や人事問題など難関続出した。

この年の明けた正月、依岡氏（当時神鋼専務・日沙商会社長）から私に日沙商会へはいってもらいたいという要望があった。日沙商会は鈴木商店の経営で、ゴム、ファイバーの製造販売を行なっており、私の両恩人依岡氏が社長、近藤正太郎氏が支配人であった。私が東京へ転勤の際にも勧誘を受けているので、今回が二度目であり、ファイバー事業に対する興味も覚えたので、意を決して神鋼から日沙商会へ転任した。

ちなみに、日沙商会入社後の私はゴムおよびファイバーの販売責任者として販路の拡大につとめ、昭和九年唯一のファイバーの競争相手、三井系の帝国堅紙（株）と合併の主役を努め、東洋ファイバー（株）を創設した。

神鋼在任期間はわずか十一年であり、しかも〃ぼんさん〃時代からの思い出のため、大局的、総合的な見地からの〃神鋼〃を浮びあがらせることはできなかったが、当時の神鋼の一端を伝え得ることができれば幸いだと思っている。

（元東洋ファイヴアー株）

城山三郎氏の句評
『雄気堂々の句』

首題で作者の城山三郎氏（辰巳会には御馴染の）が昭和四十七年七月二十九日の朝日新聞に記事を提出せられた。渋沢栄一翁と金子直吉翁との句評である。仲々面白いので左に全文を掲げます。（今村記）

書画骨董（こっとう）に興味のないわたしだが、わが家の座敷にも一本、じまんになる軸がかかっている。

たのしさに惜しむ日影に比べてはうき立つ日の長くもあるかな

渋沢栄一晩年の書である。最初この軸を見たとき、わたしは、おや、と思った。

日本経済の父といわれた渋沢栄一の人生は、その少年時愛誦（あいしょう）した詩の一句、「雄気堂々」という言葉どうり、男らしく豪快。ひとの何倍もよく学びよく遊んだ人生で、あのにこやかな温顔に見るように、憂さとか、かげりとかからは、およそ縁遠い人生に思えるからである。その渋沢にして、なおこんな感慨があったのかと、目をみはった。

わたしは、毎夜ひとり、一度はこの書に向い合う。渋沢のようなひとにとっても、人生とは果たして何であったろうと、しばし、しゅんとした思いに浸されるのである。

澁沢はこの他にも、多くの歌を残している。ほとんどが旅先での印象や季節に関するものだが、ひとつ、「――もの」と名づけるシリーズがおもしろい。

・心ゆくもの
吹く風にやがて暑さは払はれて、青葉にそそぐ夕立の雨

・厭はしきもの
うちつどふ宴のまどゐ人ごとに、受けてはかえす盃の数

・くやしきもの
若かりし昔の旅の夢さめて、うつつにかえる老のあかつき

大正期の日本経済の大物は鈴木商店の金子直吉である。金子は、夫人が俳人だったせいもあって、白鼎などと号して俳句をつくった。俳号の